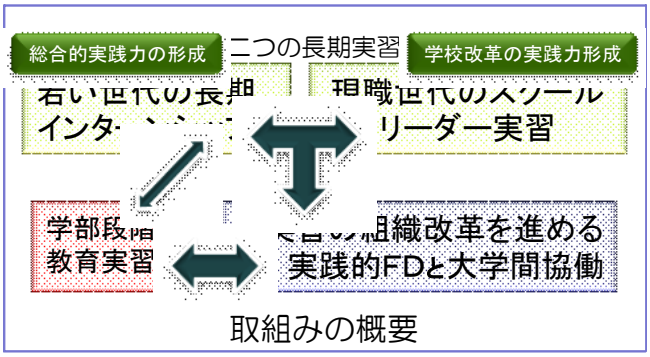
１．取組について

（１）取組の全体の概要



取組みの概要

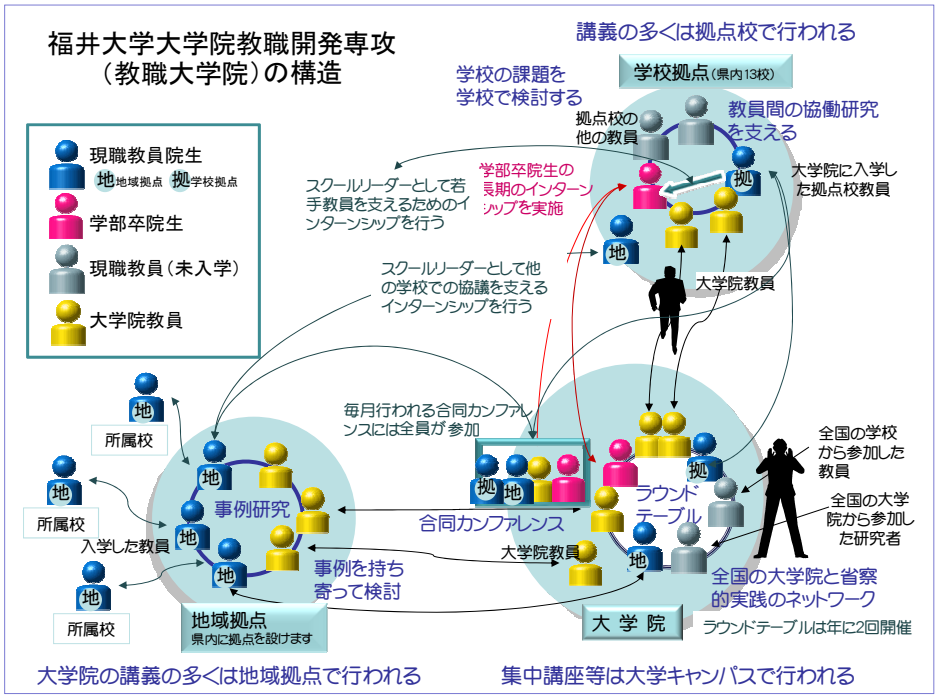
知識基盤社会に生きる力を培う新しい学びと学校をどう実現していくか。教職専門職としての教師の高度の実践力・改革能力が問われている。そしてそのための実践的なカリキュラムの実現が教育系学部・大学院、とりわけ教職大学院の最重要課題となっている。実践研究と有機的に結びついた「学校における実習」の充実はその中軸をなす。本研究は長期教育実習の先進モデルの実現と、教育実習改革大学間コラボレーションの組織を通して、高度専門職としての生涯にわたる教師の実践力形成を支えるカリキュラムと組織の実現をめざすものである。中軸となる長期実習は若い世代の教員のための長期インターンシップと、現職教員のスクールリーダー実習から構成されている。

１）長期実習の二つの基軸

①若い世代の総合的実践力を形成する長期インターンシップ（学部卒院生のための実習）

多様な子どもとの長期的な関わり、学級集団をつくり支える仕事、親や地域社会との協力関係の構築。従来の短期実習では学び難いこうした課題に直面し、困惑する若い教員が増えてきている。多様で複雑な教員の仕事について、先輩や大学教員の支援を得ながら長期にわたり総合的に実習していくシステムが必要不可欠となってきている。本取組では、拠点学校と大学が協定を結び協働体制をつくり、学部卒大学院生の１年間の長期インターンシップ(10 単位)を実現する。週三日間の学校での実習と、二日間の大学院での研究を継続的・往還的に進めることにより、自身の実践経験を省察検討し、次の実践に活かし発展させていくサイクルを実現し、総合的な実践力及び省察的実践者としての力量を培っていく。なお、大学院の講義は、実習と関連づけながら拠点学校と大学で行われている。

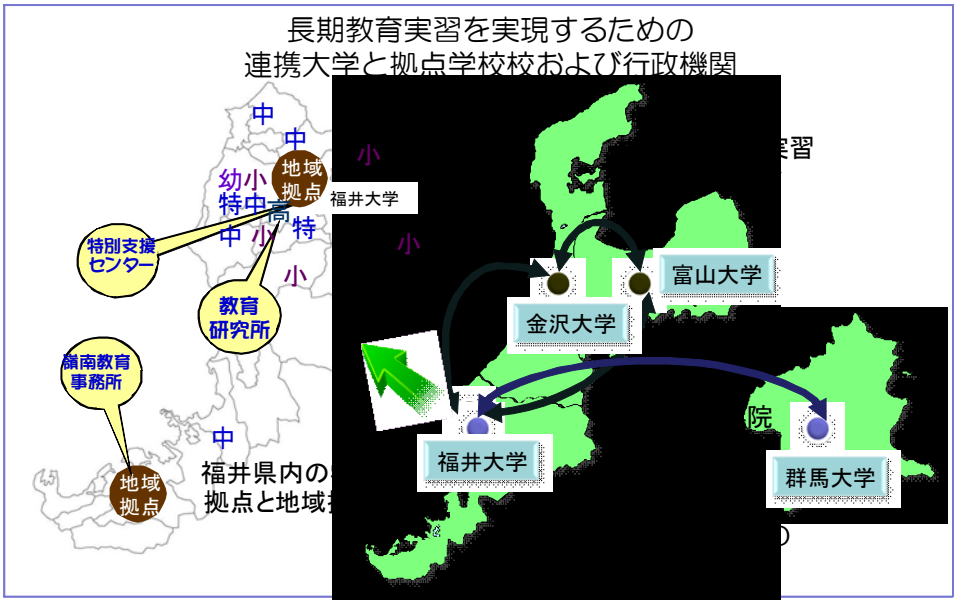
②現職世代の学校改革の実践力を培うスクールリーダー実習（現職教員院生のための実習）



一方現職の教員は今、21 世紀の知識基盤社会に生きる力を培う学校、それにふさわしい闊達な学習を実現するという困難な課題に直面している。現にある学校とそこでの学習を、新しい時代にふさわしく改革していくために、スクールリーダーは、

新しいヴィジョンを学ぶとともに組織改革を進めるマネジメントの力量、そして、教師の協働（同僚性）を支える実践力が不可欠となる。こうした実践力は従来の短期研修や、個人が学校を離れて学ぶ大学院では培うことが難しかった。本取組では、中核教員が学校を離れることなく、実践的なテーマを持って大学院に学ぶ体制をつくる。自校において同僚と協力しつつ実践を進め、その展開を大学院で精査検討し、それを自校での実践に活かしていく実践と省察のサイクルを実現し、これに基づく実習を進め、スクールリーダーとしての組織能力・実践力を培う。

２）実習改革推進のための実践的ＦＤと大学間コラボレーション



教師教育改革は、個々の大学の実践と省察の積み重ねを通して開発されるべきであるが、同時にそれらを結び共有しあい、より広く大学間の協働を実現していくことが重要である。しかし、そのためには従来の協議会や研究交流だけでは不十分である。より踏み込んだ改革的な実践とその組織化の方法について、大学を超えて多くの大学教員が共有する実践的ＦＤを実現していくことが必要であろう。本取組では他大学の実習とその改革の取組に定期的長期的に関わり、協働して実践し研究協議を重ねる実践的ＦＤ、一種の大学教員のための教育実習を組織していく。この協働の取組を通して、教員養成カリキュラム、とりわけ教育実習の相互的な検証・評価を進めていく。

①各大学の取組　各大学では以下の実習改革と地域の学校との連携協力の取組を進める。

- ●教職大学院における長期実習(10 単位)への取組（福井大学・群馬大学）
- ●学部段階における教育実習改革の取組（富山大学：堀川小学校を拠点とする単元開発を中心に据えた教育実習改革・金沢大学：WEB 教育実習ノート利用した実習生支援の取組・福井大学：Ｅポートフォリオを活用した４年間継続する教育実習の取組）
- ●学校と大学との連携協力体制づくりの取組（４大学でテレビ会議システムの活用）

②協働の実践的ＦＤと協働研究　これらの取組を交流し教育実習改革を協働で進めていくために以下の取組を進める。

○大学における実習担当者のＦＤのための「実習−研究」の組織化（大学教員の教育実習）
関係大学、及びより広く教育実習に携わる大学教員の参加を得て、実践的な力量を高め合うために、互いの大学の教育実習に実際に参画し、教育実習の運営・組織・評価に関わる実践と研究を進める。

○教育実習における実践力形成の評価に関わる共同研究（全大学）
各大学での取組とＦＤのための「実習・研究」の取組を踏まえつつ、教育実習における実践力形成のプロセスを検討し、評価する共同研究を進める。

（２）取組の実施体制等

１）長期実習の実施体制（福井大学）

学校と大学との高度の、また長期の協力が必要となる長期実習においては、その展開活動サイクルと協働関係のマネジメントこそが取組の成否を決定する中心課題となる。

①長期インターンシップの教育課程

１年間にわたる長期実習は週三日間を学校における実習、週１日を大学における省察と研究に当て、１年間の学校のサイクルに即して進められる。４月、クラスづくりに立ち会うところから出発し、子どもたちとの関係を培いつつ授業づくりを進める（５－６月）。６月には開発した単元の授業を行う。７－８月には前期の取組について、大学での集中講座において記録に基づいて省察検証し、後期の課題を導く。９月から 12 月にかけて、学校行事・単元開発・一人ひとりの子どもの生活を支える取組を進め、冬の集中講座でその取組の省察検証を行う。１月から３月にかけて、授業を進めつつ、１年間のまとめと報告づくりを行う。２年次には、学校の協働研究に継続的に関わりつつ、大学院での研究を進め長期実践報告をまとめていく。

拠点校でのメンター教員による指導

各拠点校においては、メンター教員（スクールリーダー養成コースの院生）から随時指導を受ける。

大学院教員による実地指導　担当の大学院教員が、月に２－４回程度拠点校に出向き実習の展開に即して指導助言するとともに組織間の調整にあたる。

毎週の大学でのカンファレンス　大学において毎週１日をカンファレンスと省察の時間にあて、実習の展開について検討し研究協議を行う。

長期インターンシップ６月の１週間のモデル実施例
（月火水に学校で勤務する場合）

曜日	月	火	水	木	金	(土)
内容	インターンシップ			カンファレンス	教材研究・自主ゼミ等	合同カンファレンス
場所	拠点校	拠点校	拠点校	大学	大学	大学
朝	全校朝礼	登校指導	授業準備	小グループミーティング報告会等	個別で教材研究	毎月1回程度の合同カンファレンスに出席
1限	授業参観	教材づくり補助	授業参観			
2限						
3限	授業準備補助	担任業務の補助	授業後始末補助			
4限						
給食清掃	支援補助	支援補助	支援補助	教材研究や各種研修等への参加	自主ゼミ報告会	
5限	授業参観	校外学習（総合）	校務分掌の補助			
6限	大学院講義等へ参加					
放課後		部活動への参加	個別学習指導			

長期インターンシップの年間サイクル

４月	学校現場のリズムになじむ。
５月	授業づくりと生徒指導の実際を学ぶ。
６月	単元を見通した授業実践を経験する。
７月	学級の1学期の展開をとらえ直す。
８月	夏季休業中は、大学での集中講座などカリキュラムを優先する。
９月	学校現場の安定したリズムを取り戻す。
10-11月	中心的な学習プロジェクトを展開する。
12月	メンター教員と共に教師の協働研究をまとめる。
１月	1年間の展開を踏まえた授業を展開する。
2-3月	1年間の取組にかかわる記録をまとめ、展望をひらく。

インターンシップとカンファレンスの感想

私が教職大学院に進学しようと思った理由は、拠点校での長期インターンシップや大学でのカンファレンス、現職の先生方と行うラウンドテーブルなどの活動を通して、授業力や生徒理解力、生徒指導力などの、教師に必要とされている様々な資質や能力を身につけたいと思ったからです。

長期インターンシップの実習先である至民中学校での日々は非常に楽しく、７０分授業や教科センター方式、異学年型クラスターなど目新しいものばかりです。これらの重要性に気づいたのは、カンファレンスを通して大学や現職の先生方と話ができたからだと思います。（M1黒川清貴）

大学院では、週に３回インターンとして現場の実習に行ったり、それを大学に持ち帰って仲間たちと話し合って考えを深めたりという勉強をしています。私にとっては、なんといっても、１年間という長いスパンをかけて教育現場でじっくりと子どもや先生方の姿を観察・分析できることがとても魅力的な活動です。１歩引いた目線から観察することによって、「こんなときこの先生はこういう風に声かけをするのか」などというように、自分なりにゆっくりと考えることができるからです。毎日記録をまとめて、自分の考えを自分の言葉で整理していくという活動を続けていくと、１年間でとても大きな力になっていくだろうと感じています。（M1木内彩乃）

毎月の合同カンファレンス　毎月１回大学において実習の展開に関する合同カンファレンスを行う。学部卒院生・現職教員院生の全員が参加する。少人数によるセッション方式で実践を語り多様な分野の大学院教員を交えて議論を深め実践的なアドバイスを受ける。

１年間のメンター実施内容（小学校で行う場合）

	実習ガイダンス・カンファレンス（大学で行う）	メンタリングの展開	メンタリングを受けるインターンの展開	記録と検討
2-3月	事前ガイダンス・実習計画の検討	事前打ち合わせ	事前打ち合わせ	実習計画の作成
4月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②学校の取り組みについて質問に答える　③長期展望の取組の重要性を共有	①学校コミュニティのリズムになじむ（入学式・新しいクラスづくり・一週間のサイクル・子どもたちとの関係作り）　②学校が取り組むテーマと協働研究の展開について学ぶ。③教師集団の仲間入り。実習経験の記録の作り方	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
5月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②活動や授業づくりについて相談	①主題を意識した探求。（授業づくりと児童生徒の成長支援）1-6年の縦割り班の構成と活動の開始　②4年次教育実習。③クラスを安定させる。一人ひとりの子どもたちの状況理解。授業の展開を跡づけ。クラスと授業展開をふまえて自分自身の授業づくりの展望をたてる。遠足。子どもたちの集団活動を支える　④教師の協働研究に参画	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
6月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②はじめての授業についての支援	①はじめての単元の授業を展開する	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
7月	カンファレンス　前期実習報告書のまとめ方指導	①週1回メンタリング　②半年の経験をじっくり聴き取る	①クラスの半年間の展開をとらえ直す。②夏の宿泊野外活動 ③前半の展開をふり返る。前期の実習の展開を振り返る。	週ごとの実習記録と月報告 前期報告書の作成 展開の確認（隔週）
8月	中間実習合同検討会			
9月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②安定したリズムを取り戻すことに配慮	①安定したリズムを取り戻す。②3年次教育実習　連合体育大会 ③クラスの目標を再確認。④中心的な学習プロジェクトを発展させる。	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
10月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②授業の企画についての聞き役	①中心的な授業・学習プロジェクトを展開する。②校内運動会　前期終了・秋休み・後期開始（2学期制）	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
11月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②取組の展開や手応えについて聴き取る	①中心的な学習プロジェクトの展開を省察。器械運動発表会　入試　バザー　トピック週間（外国の人と交流と英語学習）	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
12月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②協働研究の進め方、その意味について伝える	①教師の協働研究を支援。実践研究の公開授業研究会のための事前研究会　②研究部会の推進	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
1月	カンファレンス	①週1回メンタリング　②一年を集約する取り組みを励ます	①一年間の展開を踏まえた授業づくり　②教師の協働研究を支援。	週ごとの実習記録と月報告 展開の確認（隔週）
2月	カンファレンス　後期及び最終実習報告書作成指導	①週1回メンタリング　②実践記録づくりの意味伝える　③一年間の展開について共に振り返る	①一年間の取り組みに関わって記録をまとめ、長い展望をひらく 公開研究集会　冬の野外活動（スキー）	週ごとの実習記録と月報告 後期報告書 展開の確認（隔週） 最終報告書の作成指導
3月	最終実習合同検討会			

②現職院生のスクールリーダー実習

改革のための協働実践を支えるスクールリーダーとしての実践力を培うことをめざす「スクールリーダー」コースの実習は下記の３つの実習を１年間連動して進める。

「学校における協働実践研究の企画運営を中心とする実習」スクールリーダー実習Ⅰ

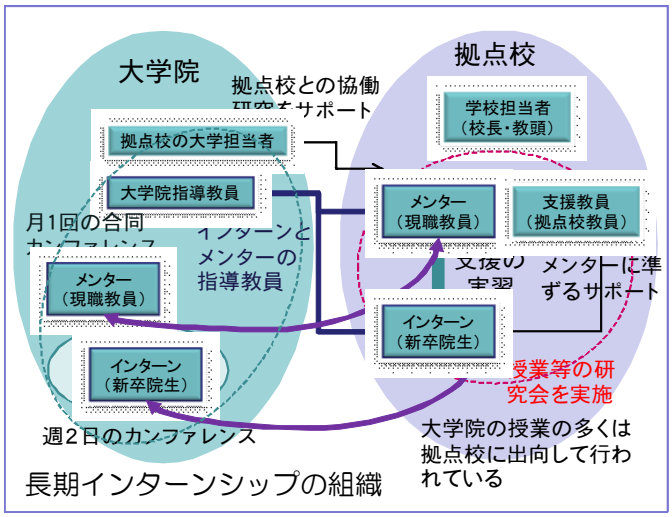
学校における協働実践の企画運営・組織化に関わる実務について１年間にわたり取り組み、その展開を記録・省察し、またカンファレンスを通じて検討を重ね発展させる。

「他校の協働実践研究や研修への支援・協力実習」スクールリーダー実習Ⅱ

他校の協働研究・校内研修に協力者として関わり研究支援を行う実習。年６回程度、協力者会議や授業研究会において協議・助言を行う。

「若い世代の教師を支えるメンターシップ実習」スクールリーダー実習Ⅲ

若い世代の教員としての力量形成を支えることは、スクールリーダーとして重要な役割である。大学院のインターンシップの学生や、臨時任用の教員に１年間メンターとして関わり、カンファレンスを重ねる。



③長期実習の実施体制

実習は前頁図のように学校と大学の緊密な協力と協働のもとで進められる。大学院の指導教員は月２-４回、拠点校に出向し実習生の取組を支えるとともに組織間の調整にあたる。

２）大学間の実践的ＦＤと協働研究の実施体制（４大学）

各大学で進められる実習改革と学校連携の取組に大学を超えて参与し、実際の学校での実習・連携の取組に参画する実践的ＦＤを、２年間にわたり定期的に進め、改革とそのマネジメント経験の共有を進めていく。また、こうした取組を集中的に検討し省察する集中研究会を夏と冬の２回ずつ行い、６月と３月には大学間合同会議を行い、改革と協働研究の展開をより広く伝える場とする。その実施計画は表の通りである。

大学間の実践的ＦＤと協働研究の実施体制

	平成20年度		平成21年度
4-7月期	教育実習相互参画の企画・準備・組織化	4-7月期	第2年時の長期実習の開始　前期の相互参画
6/28-29	4大学間合同会議　日本の教育改革のための福井会議・学校と大学との連携をめぐる研究協議・教育実習改革のための大学間コラボレーション会議	7/3-4	4大学間合同会議　日本の教育改革のための福井会議・学校と大学との連携をめぐる研究協議・教育実習改革のための大学間コラボレーション会議
7-8月期	夏の集中研究会　前期長期実習の省察・検証のためのセッション（群馬・福井大）	7-8月期	夏の集中研究会　前期長期実習の省察・検証のためのセッション（福井・群馬大）
9-12月期	学部段階の教育実習をサポート　堀川小学校実習の検討（富山・福井大）	9-12月期	学部段階の教育実習をサポート　堀川小学校実習の検討（富山・福井大）
12-1月期	冬の集中研究会　WEBノートとEポートフォリオの検討（金沢・福井大） 9-12月期の実習の展開の省察・検証・展望	12-1月期	冬の集中研究会　WEBノートとEポートフォリオの検討（金沢・福井大） 2年間の実習の展開の省察・検証・展望
1-3月期	第1年時の実践の省察・検証・評価とそれにかかわる報告書の制作	1-3月期	第2年時の実践の省察・検証・評価とそれにかかわる報告書の制作　個人報告書及び学校への報告書制作をふまえた大学への報告書　2年間の検証と今後の展望
2/8-3/1	4大学間合同会議　日本の教育改革のための福井会議・実践研究福井ラウンドテーブル　大学間コラボレーション集中研究会	2/27-28	4大学間合同会議　日本の教育改革のための福井会議・実践研究福井ラウンドテーブル　大学間コラボレーション集中研究会

（３）取組の特色

専門職教育は、従来の技術修得・完成教育モデルから、生涯にわたって実践の場と研究とを往還しつつ高度の専門性を培っていくモデルへと大きく転換しつつある。実践の場での専門職としての協働研究が鍵となり、これを支える専門職教育の組織化が求められている。本取組は、学校を拠点に若い世代と現職世代とが共に学び合う世代協働の視点によって、一人ひとりの実践力を実現しつつ、それを支える実践コミュニティを培っていく点に特色を持っている。

１）世代間の協働と支え合いを促す実習（世代のサイクルの活性化）

第１の特色は、インターンシップやスクールリーダー実習が個別独立に行われるのではなく、拠点学校を中心に、世代協働のプロジェクトとして進められる点にある。

若い世代の教師の実践力形成は、学校での実践経験、その省察・再構成の積み重ねによるが、a)モデルとなる現職教師の存在、b)メンター的な教師によるアドバイスと支え、c)学校の協働組織による支援にも大きく依存している。若い世代の実践力形成にとって現職世代の実践力・支援力、そして協働の組織力を高めていくことが条件となる。逆に現職世代のスクールリーダーとしての実践力の形成は、若い世代の積極的な実践と成長を促し、

協働の改革への参画を促すことが課題となる。両者が支え合って発展していくことが、それぞれの実践力形成にとって重要な鍵となる。本取組ではそうした相互関係を支える大学院の役割と授業構築を目指している。つまり、世代協働関係を培うカリキュラムデザインとその組織マネジメントに本取組の特色がある。

2）新しい学校づくりの実践に参画する実習

第２の特色は、実習校が大学と連携し21世紀の新しい学校づくりに取り組む拠点学校である点にある。大学の研究・教育と学校での実践の連携が困難な理由は、改革志向の研究と学校の重い現実のギャップにある。このような現実を踏まえ、学校と大学とが手を携えて協働の授業づくり・学校づくりの取組を進めることは、この溝を超えるもっとも確かな方法である。本取組では、教職大学院の授業を拠点学校で他の教員を巻き込んで行うと共に、相補的な二つの世代の長期実習を進めるところに最大の特長がある。このことにより、21世紀の学校の中心的担い手となるべき若い世代が、新しい授業・学校づくりに挑戦する教師たちに学び、加えて、現職世代が次代を育てるスクールリーダーとしての実践力を培うことができる。

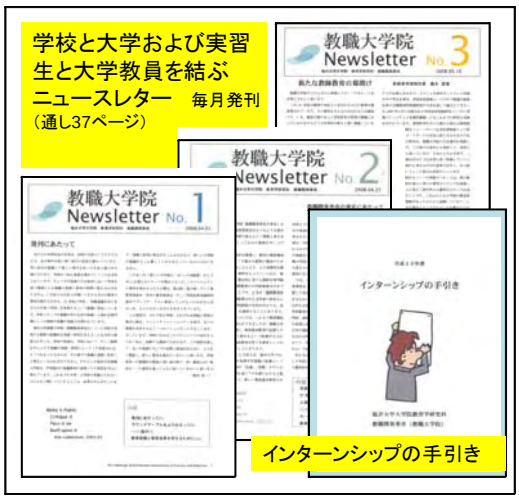
3）実習を支える大学教員のコラボレーションと実践力形成組織

第３の特長は、組織的な実習改革を１大学の取組に止めることなく、大学間や学部・大学院間で広く共有していくプロジェクトを連動して進めていくことである。とりわけ長期実習の場合、地域の学校との恒常的な協力関係の創出とその維持発展、担当チームによる組織間調整のマネジメント能力と対学校支援の実践力の形成が不可欠の要件とある。こうした、実習改革の基盤となる大学教員の実践力形成に関わって、互いの実習の展開に参加し合いながら、その組織過程を研究する取組を進めることによって、単なる研究会や協議会では困難な実習の組織経験の交流と共有を実現することができる。

（４）関係団体等との連携

長期実習を実現する鍵は、学校・教育委員会等の関係団体との密接な恒常的協力関係の構築であり、その維持発展である。

１）学校との連携・協働　拠点校と教職大学院は、学校のテーマに即した協働研究とその推進の中心となる教員の大学院入学を含む協定を結ぶ。教職大学院の担当教員（複数）が、学校を月２回程訪れ、学校拠点の協働実践研究の展開について合同の研究と協議を進める。研究協議では、大学院生のインターンシップとスクールリーダー実習の展開について確認し指導していく。その都度、管理職の教員とも相談しつつ年２回の運営協議会において協議を重ねていく。



２）県教育委員会等の連携・協働　県教育委員会とは、現職大学院生の派遣に関わって、随時協議を重

ねるとともに、年２回の運営協議会において連携内容の確認と決定を行う。県教育研究所等は、教員研修を進める県の中心的なセンターであるが、研修のあり方をめぐる協働研究を教職大学院と連携して進める協定を結び、センターの研究員が院生となって実践的な協働研究が組織されている。

３）４大学の研究協議　４大学では、年２回の合同会議、年２回の集中研究会を開催する。福井大学と群馬大学では、福井大学の長期実習の実際を群馬大学の長期実習と比較し、検討を進める。また、学部段階の実習との接続について検討する。福井大学・富山大学・金沢大学では学部における単元開発を中心とした実習と、ＥポートフォリオやＷＥＢ実習ノート等ネットを用いた実習サポートシステムについて、実習の組織経験の交流を交えて検討する。日々の検討はテレビ会議システムを用いて行う。

４）ニュースレターによる情報共有　各学校における実践研究と実習の展開を各機関同士で共有するために、教職大学院ニュースレターを年 10 回程度刊行する。

（５）取組の有効性

１）実践の展開と実績を記録にもとづき精査検証する質的評価（評価の方法）

①個人の実践的力量形成の評価（個人評価）

専門職の高度な専門性に関わる実践力の評価は、平均的・形式的な尺度による評価で捉えることは難しい。右図のように、専門職同士・そして研究者も加わって、実践の発展を跡づけ、記録化し検討する協働研究を通して、実践力形成の評価検証を進めることが必要となる。今回の取組では、高度専門性の実践力形成に関わる評価の組織化を進める。

本取組で用いる個人の形成的評価プロセス

①実践を展開し、その展開を記録化し綿密な省察検討を加える。
企画・実践した授業の記録、子どもたちの成長に関わる支援の取組の記録、学級作りや特別活動の展開に関わる記録、それぞれの記録について、一年間の展開の中で発展が見られるかどうか、記録の時系列に即した検討を通して明らかにしていく。
②実践の展開とその記録について、外部の評価者も加えて検証する。
③実践の省察再構成のサイクルを通しての内部評価・相互評価と、開かれた公開検討会による外部評価のサイクルを年間2回ずつ組織する。
④長期実践研究
⑤実践の記録と評価を、報告書として刊行する。

②実習の展開・組織・システムに関わる評価（組織評価）

長期実習について、個々の実習生の実践展開をふまえた記録とその評価、学校における協働の実践の展開を示す報告書の検討を踏まえ、教職大学院における実習のカリキュラム・支援組織の在り方について、吟味検討を行い報告書としてまとめるとともに、この報告に関わって、関係機関や外部の専門家による評価委員会を組織し、実習の評価を行う。

２）取組の有効性について（有効性）

①長期実習の必要性と有効性　学級づくり、子どもたちの成長の長期にわたる支援、長期的な授業づくりなど、短期実習では取組得ない重要な教師の営みについて実践的に学ぶことができる。またスクールリーダーの組織マネジメント・若い世代を育てる営みなど、短期研修では学び得ない取組を大学と連携した学校拠点の実践を通して学ぶことができる。

②世代間協働の有効性　若い世代の実践力形成は、現職世代の実践力と支持援助によって支えられ、逆にスクールリーダーの実践力は若い世代の実践を活性化しうるかどうかに懸かっている。両者は連動しており、個々の展開を支えつつ同時に、両者が相互的相補的に結び支える視点とデザイン、相互性を活かす視点が有効性を持つ。

③協働研究のコミュニティという視点の必要性と有効性　１年間の実習の展開を支える学校と大学との連携は、それが積み重ねられていくことにより、実質的に恒常的・日常的な

協力体制の実現に結びつくことによって安定する。学校と大学との協働実践・協働研究のコミュニティの実現が必要不可欠であり、またそうした安定した基盤を踏まえて長期実習とそこにおける実践力形成が確実なものとなる。

３）実習改革のための教職大学院・教育系学部コラボレーション（成果の共有）

教職大学院・教育系学部で実習改革のための協働研究をより広く進めるために教育実習改革のための大学間コラボレーション（教育実習改革コラボレーション）と実践的ＦＤの取組を進めるとともに、さらにその成果を、教師教育改革のための福井会議を初めてとする公開研究集会、及び報告書によってさらに広く公開していく。

４）教員の生涯にわたる実践的力量形成を支えるシステムの実現（今後の継続的な取組）

２年間の取組によって教職大学院における長期実習のモデルを構築しそれを支える組織を拡充した上で、次の３点の課題に取り組んでいく。

①免許更新制講習を含めた生涯にわたる教員の力量形成を支える地域システムの構築

②世代間協働長期実習のための大学間コラボレーションの発展

③教師教育評価のための国レベルの評価機構の組織化とその質的充実への取組

来年度以降本格的に進む全教員の 10 年ごとの免許更新制講習と教職大学院における綿密な実践力形成の成果とが結びつくならば、生涯にわたる教員の高度の専門性形成の地域システムの実現が展望できる。同時に、こうした取組を大学間で共有し、さらに高度専門職としての教師の専門性形成とその教育に関わる国レベルの評価組織・機構の実現とその質の確保に結びつけていく。

（６）取組経過や成果等に関する情報の提供方法

１）ニュースレターの定期的な刊行　各学校拠点の実習、実践の展開、一人ひとりの取組について、ニュースレターにまとめ共有するとともに、情報発信する。ニュースレターは年 10 回程度発行され印刷媒体として学校・教育委員会・研究所等関係機関や、大学や研究者に配布されるとともに、インターネット上でもこれを閲覧することができるようにする。

２）インターネットによる情報の公開　実習の展開を含む教職大学院の取組について、インターネットにおいて、その経過と成果を公表する。

３）一人ひとりの実践にかかわる年次報告書の作成　長期インターンシップ・スクールリーダー実習の取組は、実習報告書としてまとめる。これを中心に「長期実践研究報告」を作成し、この報告書は印刷し刊行する。また、これを公開研究集会（学校改革実践研究福井ラウンドテーブル)において発表すると共に蓄積し､閲覧可能なアーカイブスを作成する。

４）組織報告書の作成　実習を含む教職大学院の取組について、年次報告書を作成し、これを運営協議会及び公開研究集会（学校改革実践研究福井ラウンドテーブル）において報告し、また刊行するとともに、インターネットにおいてもこれを公開する。

５）大学間コラボレーションの取組に関わる経過および成果報告書　各大学の教育実習改革の展開、地域・学校との連携、学部・大学院の実習連携、教育実習担当者のＦＤに関わって、取組の経過と成果を示す年次報告書を作成し公表するとともに、これを公開研究集会（学校改革実践研究福井ラウンドテーブル）で発表・検討する。

６）公開共同研究会の実施（年２回）　６月と３月に、国内外の教師教育の専門家や実践者を招いた公開共同研究会を行い、長期実習をはじめとする教職大学院の取組について広くこれを公表し、検討を行う。